寄稿

「オーガニックファーマーズマーケット」から生まれる、広がる

「オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村」は名古屋市の中心部、栄にある都市公園オアシス21で、新規就農した有機農家本人が消費者に直接販売する朝市です。毎週土曜日の8時30分から11時30分、愛知県と、愛知県に接する岐阜県・三重県・長野県・静岡県から、25～35農家がやってきて農産物を販売しています。

朝市村をはじめたのは2004年。2015年10月に、12年目に入りました。

最近増えている「オーガニックマーケット」は、農産物以外のパンやスイーツの出店者が多い傾向にあるのですが、朝市村の出店者は農家だけ。出店希望の連絡を受けると、生産者代表と事務局が圃場の確認に出向いて、本人と面談して、参加してもらうかどうかを決めています。

農産物を作った本人がおいしさや栽培方法を伝えながら販売していて、並べることができるのは農産物とその加工品のみ（加工品の原材料は本人が作った農産物に限る）。有機の農産物がしっかり売れるマーケットに成長しました。有機農産物とその加工品だけのオーガニックマーケットとしては日本最大規模とされていて、最近の1回あたりの来客数は約1200人となっています。

ただ、新規就農者の販路を作ることしか考えていなかった

「朝の公園ににぎわいを作り、オアシス21の名物にしたいから、朝市がやりたい」と提案してくださったのは、2004年当時、名古屋市の職員で、オアシス21に出向していた知人でした。今の私だったら、「人通りのないところで朝市をするなんて、やめた方がいい」と言うかもしれません。が、当時私は、有機農業に取り組む団体のリーダーの集まりである全国産直産地リーダー協議会や有機農業学会の事務局をしていて、会議の席でたびたび「有機で新規就農を目指している人たちの販路がなくて困っている」と聞かされていましたから、「朝市ができたら、新規就農者の販路が作れる」と気持ちが弾んだことを憶えています。

毎月第2・第4週の開催と決まり、第1回となる10月9日にむけて、試行錯誤しながら準備を進めましたが、大型の台風22号が近づき、被害も出ていたことから、前日に中止を決めることになりました。この日以降、台風が来ても、大雪が降っても、一度として休んだことはないのですが、出鼻をくじかれたスタートとなりました。

吉野　隆子

オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村村長。三菱商事株式会社勤務後、NPO法人中部リサイクル運動市民の会（にんじんCLUB）スタッフ、日本有機農業学会事務局などを経て、現在、NPO法人全国有機農業推進協議会理事、あいち有機農業推進ネットワーク役員、東海農政局有機農業推進委員会委員。2016年、オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村が日本農業賞「食の架け橋の部」大賞を受賞。共著に『本来農業宣言』（コモンズ）など。

そして、第4週の10月22日、朝市村がはじまりました。出店者は10農家。配布したちらしを見て来てくださったお客様は100人程度でした。思ったように売れないので参加する農家は減っていき、2005年4月には端境期ということもあり、4農家という記録が残っています。

出店者が少なければ朝市としての魅力に欠けるので、お客様も少なくなるという負のスパイラル状態がしばらく続きます。行政の方からは「いつやめるの」とたびたび率直な質問をいただきましたし、農家からも「やめたい」という声を聞くようになっていましたが、毎月お客様と一緒に畑に出かける「畑訪問」を企画して農家とお客様の交流の場を設けることで農家の理解が生まれ、ていねいに話し合うことで事務局の思いも理解してもらえるようになっていきました。

朝市村の開催日が近づくと、オアシス21付近のマンションにちらしをポスティングに行くことを重ね、お客様の口コミにも助けられ、少しずつ来客数も増えていきました。

2006年6月、朝日新聞で紹介していただいたことをきっかけに、一気にお客様が増えました。お客様が増えて売れるとなれば、出店を希望する生産者は増えていきます。その後、中国製餃子中毒事件、偽装表示問題など食の安全についての問題が起きるたび、お客様が増えていく様子を自分の目で確認しながら続けてきました。

気づかないうちに「仲間作り」の場所になっていた

3年目に「出店したい」とやってきた農家が、「ぼく、こういう仲間がいる場所がほしかったんです」と口にしたとき、私ははじめて「仲間づくりの場所になっていたんだ」と気づきました。彼に言われなければ、もっと後になるまで気づかなかったでしょう。

有機農家は地域に点在しています。地域に自分だけということも多く、近くに有機農家がい

ないのは当たり前です。そうした中で栽培のこと、販路のことを相談し合える仲間がいることは、どれほど楽しく心強いか。

朝市村のさなか、すきま時間を見つけては、ほかの農家のところに行って会話を交わしている姿をよく見かけます。朝市村メンバーの圃場を見に出かけたという話もよく耳にします。互いの暮らしから学び、野菜を見て刺激を受けます。旬の野菜しかない販売の場では、同じ野菜を販売するライバルであるとともに大切な仲間でもあるのです。

毎週開催でオーガニックが「イベント」でなく「日常」になる

当初はオアシス21側の意向で月2回の開催でした。でも、月2回だとお客様はどこか別の場所で野菜を調達しなくてはならず、どうしてもイベント的な朝市にとどまってしまいます。有機農産物を「日常」にして、「朝市村の野菜だけで毎日の食卓を担えたら」という思いと、お客様から寄せられる毎週開催への要望を公園側に伝え続け、２００９年から毎週開催できることになりました。

農家の中には1回当たりの売り上げが減るのではないかと心配していた人もいたと後から聞いたのですが、毎週開催に切り替えたら、売り上げは伸びていきました。私自身もそうですが、ほかの場所で野菜を買わず、朝市村の野菜を中心に暮らしているお客様が増えたのだととらえています。

オアシス21には屋根があるため、雪が降っても、台風が来ても休まずに開催します。やってくる農家やお客様は多少減りますが、厳しい気象条件の日でも買い物にやってきてくださるお客様の支えのおかげで、農家は用意した野菜の行き場を失わず活かすことができています。

新規就農希望者は研修受け入れから就農後までサポートする

最初のころ、農家にはこちらから声をかけて出店するよう誘っていましたが、「行きたい」と思って来るのでないと続かないことが見えてきたので、声をかけることをやめました。出店者が増えていくためにいちばん大切なのは、誘わなくても「行きたい」と思ってもらえる場所になることだと思っています。いま、それがどれだけできているかはわかりませんが。

開始後2年を経過したころから出店者が増える一方だったのですが、オアシス21内の使えるスペースが限られていたため、「このペースで出店者が増えていけば、スペースが足りなくなるかもしれない」という懸念が生まれました。そこで、3年目から出店者を、「親元就農ではなく、畑を探すことからはじめた新規就農者のみ」にしぼりました。ただし、代替わり時などに有機に転換した農家や、果樹・お茶など永年作物の農家、平飼養鶏の農家などは例外として認めています。

２００８年に自然農法国際研究開発センターが中心となって農林水産省の有機農業参入促進事業を受託した際、私も運営に関わることになりました。取り組みを通じて、有機での新規就農希望者が相談に行ける定期開催の場がないことに気づきます。それまでも「農業をはじめたい」と朝市村に訪ねてきた就農希望者を、農家に研修生として受け入れてもらうことはあったのですが、きちんと相談に乗って支援できるよう、朝市開催時に毎回「就農相談コーナー」を開設し、体制を整えはじめました。

同じころ、リーマンショックが起きました。２００９年には日本にも不況が波及し、朝市開催中に「就農したい」と相談に来る人が激増しました。1日に3～4人やってくることも何度かありましたが、「何があっても農業がやりたい」というわけではなく、ただ明日からの収入を求めて来る人たちは、「研修にお給料は出ません。研修は最短でも1年。就農してもすぐに上手に野菜が作れるとは限らないので、収入を得るまでには時間がかかりますよ」と話すと、そのまま去っていきました。

今も就農希望者がやってくると、最初に厳しさを伝えます。それでも意欲が失せず、

朝市村での就農相談

こちらも「農業に向いているのでは」と感じる相談者には、現状や希望をていねいに聞き、朝市村の農家を中心に、ふさわしい研修受入先を紹介しています。それまで行政や農業団体に相談に行っても「有機で就農は無理」と言われ続けてきた彼らにとって、朝市村に来て有機農業で暮らしを成り立たせている人たちが実際にたくさんいることを目の当たりにし、研修受入先が見つかることは、「先が見えた」と感じられる瞬間なのだそうです。暗かった表情が一変して帰る人も多く、有機就農の入口にすらたどりつけない人が今も多いことがわかります。

就農を目指す人にとって大きな壁の1つとなるのが就農資金です。研修を受けながらアルバイトをして資金を貯めるのは、容易なことではありません。

2012年に青年就農給付金制度がはじまった際に、愛知県の担当者からアドバイスをいただき、朝市村を愛知県の研修受入機関として登録しました。現在、朝市村で青年就農給付金（準備型）を活用した研修を受け入れる体制が整っているのは愛知県内の7農家と、朝市村メンバーの7農家が加入している岐阜県のNPO法人ゆうきハートネットです。

研修風景（なのはな畑 / 愛知県江南市）

朝市村の相談コーナーには東海農政局の就農担当者が月1回同席し、一緒に相談にのってくださっています。制度や資金に関する部分など、朝市村事務局ではカバーしきれない部分の相談を主に受け持っていただいています。

就農後最初の販路は、朝市村以外の新しくはじめた2つのマーケットと決まっています。「新規就農者を支えたいから、新しい人が出店したら必ず買う」と決めているありがたいお客様が多い朝市村に出店したら売れるのは当然ですが、ベテランに言わせると「ぬるま湯」。まずはまだ来客数の少ない2つの市での販売を経験してから、朝市村に出店ということをルールにしています。直売を体験し、お客様の反応に直接ふれながら農業に取り組むことで新規就農者は成長し、自分のお客様を作りながら販路を広げていきます。

これまでに24人が朝市参加農家で研修を受けて就農していて、現在10人が研修を受けています。新規就農者が多いおかげで朝市村メンバーの年齢層は非常に若く、研修生の育成や朝市村の運営を担っている75歳を頂点とする60～70歳代の数人のベテランを含めても、現在の平均年齢は40代前半となっています。

街に住む消費者がボランティアとして運営を担う

当日の運営はボランティアが担っています。その日参加できる人が、参加できる時間だけ関わる自由な形にしていて、中心的に動くメンバー4人以外は、出欠について事前連絡なしで運営しています。それでも毎回約15～20人が参加して、事務局が指示することなく運営できる体制ができあがっています。ボランティアなしに、朝市村の運営はできません。ボランティアには交通費のみを支給しています。

幼稚園から高校生までの子どもボランティアも毎回数人

朝市村のボランティア

が参加していて、準備や販売・片付けを手伝い、農家の子どもたちと一緒に遊び、雰囲気を盛り上げています。

朝市村を運営するための資金については、立ち上げ時にオアシス21を運営する栄公園振興株式会社（※1）から机の提供などの支援を受けましたが、それ以降は補助金などを使わず、出店料収入だけで運営してきました。補助金は一時的なものなので、続く仕組みを作るには自前でやるしかないと考え、机1本千円という出店料の範囲で、できることに取り組んできました。

朝市村会場は都市部にあり、オアシス21には公的駐車場がないため、出店者には交通費や駐車場代などの負担がかかります。そうした負担を踏まえたえうで、千円なら新規就農者でも出店できる価格ということで決めた金額でした。

最近、1農家当たりの売り上げ金額が上がっており、他のマーケットの運営などに予算をまわしていきたいと考え、2015年10月に机1本2千円に変更しました。

※1 栄公園振興株式会社：名古屋市50%、残り50%を中部電力・名鉄・三菱東京ＵＦＪ銀行などの地元関連企業が出資して設立した第三セクター。

新たなマーケットを手がけて販路を広げる

参加農家が増えたため、2013年5月、名古屋駅前で会社帰りのＯＬに野菜を買って帰ってもらうことを目指した「ナナちゃんストリートオーガニック夕ぐれ市」をはじめました。最初は通行人が遠巻きにして通り過ぎるだけだったのですが、2年半経過した現在はすっかり定着し、集客・売り上げとも増加傾向が続いています。当初はパート帰りの主婦層が目立っていましたが、最近はＯＬやベビーカーを押してやってくる子ども連れの主婦が非常に増えました。場所柄、単身赴任と思われる男性の利用も多く、熱心に料理法をたずねる姿も目立ちます。

2013年11月には子ども人口が名古屋市内で最も多い緑区で病院と連携し、「みどりオーガニックマーケットin南生協病院」をはじめました。現在、名古屋市内の3か所でオーガニックマーケットを運営しています。

飲食店の方の買い出し姿もよく見かけます。地元の有機宅配の団体の人たちが新たな生産者に出会いたいとやってくることもあり、マッチングの場にもなっています。

ナナちゃんストリートオーガニック夕ぐれ市

東海農政局・愛知県栄養士会との連携の場にも

6次産業化に取り組む農家の販売場所を求めていた東海農政局経営・事業支援部の依頼で、2013年12月から月2回、有機で6次産業化に取り組んでいる認定者の販売コーナーを設置しています。併せて6次産業化の相談コーナーも開設しています。

朝市村には食や農業に関心のある消費者がたくさん訪れることから、東海農政局消費・安全部の依頼を受け、2015年春から会場の一角で「移動・消費者の部屋」を

開催しています。毎月テーマを決めて農政局内の「消費者の部屋」で行っている展示を、少しでも多くの人に見てもらいたいとの思いからはじまったもので、好評を得ています。展示とともに、お客様からの質問にも応えています。

愛知県栄養士会は、朝市開始当時の2004年10月から月に2回、栄養相談コーナーを開設して、体重・体脂肪などの計測を行いながら、お客様の相談に無料でのっています。月1回というように決めて定期的に訪れる人も多く、人気コーナーとなっています。

朝市村が地域とつながって変化が生まれた

朝市村のある都市部と、それぞれの農家が営農している地域をつなぐさまざまな形の交流によって、地域の活性化がはかられています。そうした中から2つの地域との交流で生まれた変化を紹介します。

有機農家が都市とつながり中山間地域の耕作放棄地を減らす

中津川七ツ平高原（岐阜県中津川市）

中津川市は面積の80％を森林が占める中山間地域でありながら、農地面積は岐阜県下2番目の広さがあります。標高は300mから790mと起伏が激しいため棚田も多く、耕作放棄地が年々増えています。

中津川七ツ平高原の農場長を務める太田誠さんは、中津川にある落合土建の前社長。2006年、耕作放棄地を活用して栗や野菜の栽培をはじめたところ、次第に農業の面白さと可能性にひかれるようになっていきます。周囲に広がる耕作放棄地の再生に、本業で培った技術や機材を活用しながら年々畑を広げ、農地法改正後の2011年12月には母体の落合土建として農業に取り組むようになりました。

現在、約3・6ヘクタールの農地で年間約120種類以上の野菜を作っています。当初は野菜と栗などの果樹だけでしたが、地域の人から「田んぼを借りてほしい」と頼まれたことをきっかけに、米の栽培にも取り組んでいます。

販路の足がかりとなったのが朝市村です。2007年の秋から朝市村に出店。少しずつ種類と量を増やしていき、今では種類の豊富さや品質の高さから、個人の買い物客だけでなく飲食業の固定客もついて売り上げを伸ばしています。朝市村・夕ぐれ市での売り上げは年間約800万円、地元での直売などを含めると約1600万円まで売り上げるまでになったそうです。

2015年の春、中津川市から「ふれあい牧場」の運営を委託されました。牧場内にあるレストランの食材も、中津川七ツ平高原が栽培した農産物を活用しています。朝市村・夕ぐれ市でお客様に呼びかけて牧場への集客を伸ばしていて、2015年9月中旬の段階でのふれあい牧場の売り上げ（入園料・食事）は、昨年比約150％（概算）程度となっているそうです。

都市とつながることで有機による新規就農者が増加し地域の活力に

NPO法人ゆうきハートネット（岐阜県加茂郡白川町）

岐阜県南部に位置する白川町は、都市部の就農希望者が移り住み、年々新たな有機農家が増えている元気な地域です。この町で就農する人が増えているのには、いくつか理由があります。

ひとつは就農者を支援する地元コーディネーターの存在です。地元の有機農家を中心としたNPO法人ゆうきハートネットの西尾勝治さんらは「就農したい」という相談を受けると、研修だけでなく、家や農地を探します。就農直後の収入が少ない時期の現金収入確保のために、地元の養豚場や福祉施設などでのアルバイトまで紹介する行き届いた支援を行っています。

2010年には国の有機農業モデルタウン事業のハード事業を受けて、町内に研修施設「くわ山結びの家」を建設。ここで寝泊まりしながら長期の研修を受けることができ、研修受け入れ体制も整いました。

2006年から2015年の間に、白川町に有機で就農した農家は16戸、隣町で就農しゆうきハートネットメンバーになっている3戸を加えると、19戸が同町を中心とした地域に移り住んでいます。うち9戸は朝市村経由。そしておよそ3分の2にあたる11人は現在30代と若手が多いのも特長です。若い人たちが有機農業に取り組む姿や栽培状況を見て、慣行から転換した農家もあります。

西尾さんらにお世話になって移り住んだ人たちが、参入者の面倒をみていることも定着の一因となっています。就農者同士良い仲間になり、助け合いつつ有機農業に取り組んでいます。

有機での新規就農者にとって最大の問題となる販路についても、基礎部分が整っています。米は「はさ掛けトラス

ト（※2）」、大豆は「大豆トラスト」という形での販売を行っていて、栽培前に収入が確保できる仕組みです。

白川町から車で2時間の朝市村での販売も、収入の柱の1つとなっています。そして、都市の人たちから野菜や米への感想を聞き会話することを通して、新規就農した農家は成長していきます。

白川町の世帯数は3208戸（2015年9月現在）、有機で就農した16戸は全体の0・5％に相当します。新規就農した人たちの多くは独身時代に移り住み、町外の人と結婚・出産しているため、2007年以降人口は38人増えました。この人数は人口8993人の町の0・42％にあたります。近いうちにさらに若い夫婦が移り住む予定です。若い人たちが加わり子どもを産むことで、平均年齢も引き下げています。

増田レポート（※3）では、岐阜県の消滅可能性第1位に挙げられている白川町ですが、朝市村では就農相談に訪れた人が就農地を希望する人数第1位となっています。研修と就農の候補地のひとつとして白川町に出かけ、地域を見て、就農した人たちと話した人はすぐ「白川町に決めました」と言ってきます。有機農家になりたい人たちにとっては、白川町は魅力的な場所になっています。

オーガニックファーマーズマーケットを活用してできること

朝市村をはじめたころ、朝市は「販路作り」の1つの方法としか考えていなかったのですが、10年以上続けてみて、街でオーガニックファーマーズマーケットを開くことは、さまざまな広がりや可能性につながることが見えてきました。

消費者への直売、飲食店や有機宅配とのマッチングによる販路開拓、有機農家同士の仲間作り、消費者がオーガニックを日常にすること、新規就農者の育成、さまざまな団体との連携、そして地域づくり…。有機農家、とりわけ新規就農した人たちは、本当に楽しそうにこうしたことに取り組んでいます。そんな姿を見ていると、「朝市村を通してできることはまだあるんじゃないかな」と感じます。この先に何が待ち受けているのか、関わって10年以上経つ今でも、わくわくしながら過ごしています。

2015年1月の朝市村　© 中日メディアブレーン

※2 はさ掛けトラスト：トラストは「信託」という意味。会員が農家を信じて作付前に出資する。農業や農地を守る運動でもある。はさ掛けトラスト会員は田んぼ30坪を一口として年会費3万円をあらかじめ出資。収穫した米は不作豊作に関わらず会員で均等分配。一口につきおよそ35kg～42kgが目安。会員は「田植え」「草取り」「稲刈り」「はさ掛け」、稲わらを利用した「ストローベイルハウスづくり」などの作業に参加する。

※3 増田レポート：子どもを出生する女性の約95%を占める20歳～39歳の女性人口に着目、現状の出生率と社会的移動を前提として2040年時点で人口が1万人を切る自治体を挙げ、消滅可能性が高いとした。同レポートの試算では523自治体にのぼるとされており、具体的な自治体名も掲載している。